

猫

The Story of Mya-ta & Giju-ta

東良
Miki Tohru
美季

の
神
様

講談社
文庫



講談社文庫

常州大学图书馆
藏 猫の神様 章

東良美季

講談社

著者 | 東良美季 1958年神奈川県生まれ。國學院大學文学部哲学科卒業。雑誌編集者、音楽PVディレクター、映像監督、グラフィック・デザイナーを経て執筆業に。著書には『代々本忠 虚実皮膜——AVドキュメンタリーの映像世界』『東京ノアール——消えた男優 太賀麻郎の告白』などがある。

ねこ かみさま
猫の神様

とうら み き
東良美季

© Miki Tohra 2012



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2012年11月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——慶昌堂印刷株式会社

印刷——慶昌堂印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277380-5

目次

プロローグ 007

第1章 葬送の日 011

第2章 猫の神様 043

第3章 初春 059

第4章 君は大きな存在 075

第5章 一進一退 089

第6章 晩秋へ 109

第7章 戦い 127

第8章 最後の日々 145

第9章 猫の神様、再び 177

エピローグ 201

謝辞 210

あとがき 212

解説 勝谷誠彦 229



講談社文庫

猫の神様

東良美季

講談社

目次

プロローグ 007

第1章 葬送の日 011

第2章 猫の神様 043

第3章 初春 059

第4章 君は大きな存在 075

第5章 一進一退 089

第6章 晩秋へ 109

第7章 戦い 127

第8章 最後の日々 145

第9章 猫の神様、再び 177

エピローグ 201

謝辞 210

あとがき 212

解説 勝谷誠彦 229

猫の神様

やわらかく自由な魂と、彼らを愛する人々のために――。

プロローグ

夢を見ていた。場所は、十五年前に取り壊したはずの実家だった。

僕は二階のベランダにいて、台風で落ちた木の葉や小枝を掃除している。それらがあまりに多くて、そのまま庭の方へ落として良いのか迷っていると、隣家の御夫婦が屋根の上に乗ってやはり台風後の片付けをしていらして、「市の清掃の方が拾いに来てくださるので落として良いみたいですよ」と教えてくれる。しばらく作業して、大方片付いたので屋根にかけてある梯子で庭の方に下りていくと、雨樋のところにぎじゅ太が乗っていた。

「何んだお前、こんなとこにいたのか」

そう言つて抱き上げ、地面に下りた。

「みゃ太はどうした？」

ぎじゅに話しかけながら見廻すと、みゃ太は庭の石灯籠の上にちよこんと乗っていた。

二匹とも何故か半透明だったが、夢の中の僕はそれを不思議には思わない。ぎじゅは八〇%くらい透き通っていて、みゃ太は五〇%くらいだろうか。僕は二匹を両脇に抱きかかえる。すると猫たちはいつの間にか実際の二倍ほどの大きさになっているのだが、実は彼らが大きくなったのではなく、僕が小さくなったのだと気づく。

母親が玄関の方で掃除をしているようなので、そうだ、猫を見せに行こうと思う。この猫たち、僕が大人になった時に飼っていた猫だよ、と。その時、僕は小学校三年生くらいになっていた。

眼が覚めると六時半だった。いつものようにパソコン——iMacG4を立ち上げ、お茶碗二つに水を入れて、デスクトップに貼り付けてある猫たちの写真の前に置く。

「そうか、お前たち、僕が寂しそうにしてるから夢に出てきてくれたのか」と声をかけた。

ジョギング・ウェアに着替え、熱い珈琲コーヒーを入れ、ちびちびと飲みながらストレッチをした。TVをつけ、小さな音で流していた。何故、台風の後、夢を見てい

たのかわかった。天気予報では昨夜、木枯らし一号が吹いたと言っていた。眠りの中で、窓の外に吹く風の音を聴いていたのだろう。

また、冬が来る。一年に一度だけ、本物の孤独に出会える季節が来るのだ。

「さあ、走ってくるよ」デスクトップの猫たちに言った。

仕事場の窓から外を見ると、公園のアスファルトには北風が飛ばしていった枯枝や枯葉が散乱していた。僕の中にも、枯れて風に落とされた枯枝と木の葉がある。それを誰かにお願いするのではなく、自分で拾い集めるようにこの本を書こうと思った。

冬の冷たく深い孤独の中で、たった一人考えてみよう。そうすれば猫たちが僕に与えてくれたものが何だったのかが、わかるようになるかもしれない――。

第一章 葬送の日

彼が死んだのは、暖かい春の陽射しが射し込む、穏やかな朝だった。十年と八カ月一緒に暮らしたというのに、それはとてもあつけないお別れだった。

夜明けに一度トイレに起き、台所で水を飲んだ時にぎじゆ太を見た。もう窓から見える空が白くなり始めていたから、五時は過ぎていたと思う。ぎじゆにはちよつとした身体からだのハンデがあつたから、ことあるごとに彼の姿を探すのが、僕の癖になっていた。その時はリビングのお氣に入りの椅子の上にいて、丸くなつて眠っていた。

次に眼が覚めたのは六時過ぎだった。ぎじゆ太の兄貴のみや太が「ゴハンくれ」と起こしに来た。けれど台所のエサ場に行くと猫の茶碗の中には昨夜入れたドライフードがまだ残っていたので「なんだ入ってるじゃないか」と言い、ついでにまたぎじゆを見た。

彼は椅子からフローリングに降り、床に射し込み始めた陽だまりの中に横になっていた。暖かい春の陽を求めてそちらに移動したのだろうと思った。悔いがあ

るとしたらその時だ。何故触れてやらなかったのだろう。ひよつとしてみや太は、相棒に異変があると僕に伝えたかったのかもしれない。

仕事で疲れていた。いつもなら六時には起き出すのだが、もう一度ベッドに倒れ込んだ。

どのくらい眠っただろう、突然「げふっげふっ」という大きな音がした。僕の住むアパートはペット対応型マンションということになっていて、大型犬を飼っているお宅が多い。寝室の側にある廊下で大きな犬が咳せきをしているのだろう、そのくらい大きな音だった。続いてまた「げふっげふっ」といった。違う、リビングの方からだ。慌ててベッドを飛び出し、

「ぎじゅ、どうした？」と声をかけた。

ぎじゅは春の陽だまりの中、仰向けに長く伸びていた。口から舌がダランと長く出ていた。その長い舌のまま、もう一度「げふっ」と咳き込み、身体全体が痙攣れんするように揺れた。こんなに長い舌を見たことがなかった。無意識に時計を見ると八時だった。

ぎじゅ太に初めて会ったのは、一九九三年の七月だ。まだ梅雨が明けない雨の